

## 挑発的ダイバーシティのための〈キャンプ〉論

——成蹊高校スクール・ダイバーシティの現在地——

久保田 善丈\*

### 0. スクール・ダイバーシティって？

「食べものの名前じゃないよダイバーシティ」  
—これはわたしたちスクール・ダイバーシティの  
2016年度文化祭展示企画のひとつ「ダイバーシ  
ティ川柳」コーナーにあった一句で、まあ、半分  
はネタですが、だからこそ、このころがターニン  
グポイントだったということをおうかがわせる貴重  
な資料、とも言えそうです。

スクール・ダイバーシティは、2013年に発足  
した成蹊高校有志のダイバーシティグループで、  
ここ数年、「常駐」という感じなのはだいたい10  
名弱、生徒と卒業生と教員がそれぞれ持っている  
ものを出し合って、この社会をよりダイバーシ  
ティな社会に—ということ活動しています<sup>1)</sup>。とは  
いっても、現実的なフィールドはわたしたちの学  
校、成蹊高校です。そして、高校でダイバーシ  
ティグループ、というのは、やはり簡単ではありませ  
ん。めんどくさい人認定、意識高い系認定とい  
ったやっかいなハードルを越えてこないとそこに参  
加することはできません。つまり、なんとなく遠  
巻きにされる感じなのですが、そういう空気自体  
を変えていくことも目的のひとつです。もちろん、  
ダイバーシティを食べものの名前だと思っ  
た人はいなくなりましたが、一方で、「多様性／ダイバ  
ーシティ」といったワードが急速に一般化してきた

ことで、新たに、というか、実のところ根は同じ  
ような気もしますが、やっかいな課題と直面する  
ことになったと感じています。それは、ダイバ  
ーシティという言葉の「陳腐化」の危機であって、  
それが今度は「新しくて古い標語」として遠巻き  
にされるような空気が、早くも構成されつつある  
ということです<sup>2)</sup>。ダイバーシティはまだぜんぜん  
実現していないのに、です。

そこで、このコラムのテーマ〈キャンプ〉とい  
うことになるわけですが、きれいな湖畔で—って  
いうあのキャンプのことではないです。この春、  
わたしたちスクール・ダイバーシティに関わる  
メンバーの間で共有されたこの概念、〈キャンプ〉  
とは？そして、「挑発的ダイバーシティ」とは？  
スクール・ダイバーシティの現在地を見きわめつ  
つ—。

### 1. 〈キャンプ〉ってたぶんこういうこと

〈キャンプ camp〉なモノ・コト・人物を見つける、  
おもしろがる、志向する—という態度はそれ自体  
〈キャンプ〉な態度だし、ダイバーシティな態度  
のうちでも最も挑発的な態度のひとつになり得る  
もので、それはきっと、ダイバーシティを横領し  
つつ、それを「新しくて古い標語」「陳腐な標語」  
すなわち「行儀のいい常識」の枠に収めてしま  
おうとする社会的権威を動揺させるだろう—と、こ  
んなことを直感したわけですが、これはけっこう

\* 成蹊中学・高等学校

当たってると思います。

さまざまなレベルの社会的権威、むしろダイバーシティないろいろの妨げになってきたような権威が今、競うように「ダイバーシティ／多様性」を口にするというそのとき、ダイバーシティは角を削られつつ、横領されつつ、という状況にあるように見えます。「これを言うておけば、とりあえずPC的にも大丈夫、とにかく耳障りがいいしね」みたいな感じでしょうか<sup>3)</sup>。でも、その結果、PCの予感だけでいら立つ類いの人たちをダイバーシティから遙かに遠ざけるだけでなく、ダイバーシティ自体は、ぜんぜん実現しないまま、にもかかわらず、「新しくて古い標語」に、そしてついには「陳腐な標語」になってしまうという可能性にさらされているような気がするのです。

「多様性はもうよくない？」

「十分配慮されてるのにさらに主張？」

「また口にしてはいけない言葉が？」

これは、フェミニズムをめぐる空気と相似ですよ。ダイバーシティの陳腐化が、結果、ミソジニー、マイノリティフォビア、ウィークネスフォビアをも増幅させることを危惧せずにはられません<sup>4)</sup>。

「建前」としては広がりつつある。もちろん「建前」は大切です。建前はダサいけどすごく大事。社会を変えることは建前を変えることだと言ってる人もいます<sup>5)</sup>。例えば、日本中の校長が何かの式上、ダイバーシティやSDGsを取り上げて「素敵な発想ですよ」<sup>6)</sup>という感じで言及してくれるとしたら、それは、本当に大切なことだと思います。思いますけど、でも、ダイバーシティな運動がその段階で留まっていたら、ダイバーシティもSDGsも社会的権威のお気に入りとしてあつという間に「陳腐な建前」にされてしまうような気が

するのです。無名の詩人のこんな作品はその辺りの空気に対する危機感の表明でしょう<sup>6)</sup>。

朝礼で校長がいう多様性SDGsユネスコスクールに選ばれました

——今すぐにアナキストを讃えなければ

ここでの「アナキスト」を〈キャンプ〉に差し替えればかなりいけるんじゃない？—と考えてみたいと思います。これからのダイバーシティな活動には、社会的権威（例えば学校）をいつも何か意表を突いたやり方で出し抜いていくようなヴィジョンが大切になるのではないかな？ 陳腐化を逃れるための道筋をいくつも見つけて、そこをぬけぬけと歩いていくような知的機動力が求められるのではないかな？ そんなことを考えていて、そして、そこで効果を発揮するのが〈キャンプ〉なのではないか、という、そんなことを考えているというわけです。

それで〈キャンプ〉ってなんなの？っていうことですが、さっきも言ったとおり、ここでいう〈キャンプ〉は、きれいな湖畔でっていうあのキャンプではぜんぜんないです（もちろん「〈キャンプ〉なキャンプ」の可能性については否定しませんが）。そうではなく、ここでの〈キャンプ〉は、少しでも文系しようっていう人ならどこかで出会うはずの作家・批評家のひとり、スーザン・ソントグ（1933-2004）が提示したある感性、態度、スタイルのことで、それは、映画や絵画や小説や詩や音楽、さらには建築物からアクセサリー、ファッション他、あらゆる作られたモノやコト、人物のあり方、そして、それらを見るとき、あるいは評価するときの誰かの感性、態度のことなのです<sup>7)</sup>。ちなみに、この〈キャンプ〉、今やセレブな感性の頂上決戦にも見えるメットガラ（メトロポリタン美術館コスチュームインスティテュートの資金

調達のための祭典)が2019年のテーマとしたことで数十年ぶりに脚光をあびた概念でもあります。

さて〈キャンプ〉な感性、態度。それはソントグも指摘している通り、例えば、ドラッグクイーンをイメージすると分かりやすいかもしれません。いかにも「悪趣味」と言われそうな「不自然さ」や「人工的」な感じ、そして、これみよがしの「誇張」に、かえっておもしろさやカッコよさを見出すような感性、態度、つまり、常識的な、良識的な、行儀のいい感性や態度に抗って、「いや、これがいいんだよ、すごいナイス！」っていう読み替えができるような感性、そして、そんな読み替えの態度、要するに、過剰だったり、欠如があるのは明らかだけど、その過剰さの具合、欠如の仕方、誇張の在り方それ自体に惹かれるような、そういうことを楽しめるような感性、態度、これがざっくりと行って、〈キャンプ〉な感性、態度なんだと思います。まあだから、〈キャンプ〉に定義はなくて、それはあくまでも感覚の問題であって、個々の趣味、センスの世界での話、ということになります。でもこれ、異質ないろいろを「異質だから排除」というのではなく、異質さの、その在り方におもしろさを感覚するっていうベクトルは、スクール・ダイバーシティの感性とも親和するような気がします。というわけで、ダイバーシティの世界に、より意識的に〈キャンプ〉な感性、態度を持ち込んでみてはどうだろう、とそんなことを考えてみたいと思います。そうすると、さらにこんなことをイメージすることも可能だからです。

## 2. リスキーだけど挑発的で効果的

「〈キャンプ〉なダイバーシティ」は、「ほどよい個性」や「都合のいい多様性」でお茶を濁そうとする社会的権威を慌てさせるとし、そこに

は、アリバイみたいな、お題目みたいなダイバーシティを置き去りにするような推進力を期待できると思うわけですが、どうでしょう。もちろん簡単ではないです。過剰や欠如にこそ惹かれるとか、ときに意図的に過剰や欠如を作り出してそれをおもしろがるみたいな感性、態度。そこではときに、というかつねに、作為的な何かが要請されるし、そうすると「〈キャンプ〉を気取った痛いヤツ」になってしまうリスクもつねに取ることになるからです。そうなんですけど、でも、それもなんだかカッコいいと思うんですよ。

例えば、ドラッグ・クイーンなんかもそうだと思いますが、学校のような社会的権威からすると「不真面目でやりすぎで悪趣味な失敗したユーモア」に見えるスタイルを突き詰める、おもしろがることのできる、そこにカッコよさを見出すことのできるという感性、態度、それはたぶん〈キャンプ〉であって、そんな感性、態度とダイバーシティな感性、態度の相互乗り入れみたいな関係をイメージしてるんだけど、どうだろう—ということ。もちろん〈キャンプ〉は簡単ではないです。さっきも言ったように〈キャンプ〉は、それを意識した瞬間から「狙って外してる痛いヤツ」になるリスクとともにあるし、各方面からの反発も避けられません。なにしろ、スーダン・ソントグ自身が、こんなふうに言ってるくらいですから。

... キャンプは部外者には近寄りにくいものだ。それは都会の少数者グループのあいだの私的な掟のようなものであり、自らを他と区別するバッジのようなものにさえなっている。... 私はキャンプに強く惹かれ、またそれに劣らぬほど強く反発も感じている。(ソントグ著、高橋ほか訳、1996, pp. 431-432)

でもソントグは、それでこそキャンプを考察す

ることができるとも言ってます。意識しなくともはじめから〈キャンプ〉であるような誰かには、〈キャンプ〉を考えることも、真似ることもできないと考えるからです。まあ、そうですね、渦の中心にいたら、そこでどんなにうまく回っていたとしても渦自体を見ることはできません。つまり、「反発によって制約された深い共感（ソntag, p. 432）」こそが、〈キャンプ〉と距離を取りながら〈キャンプ〉を考え、そして〈キャンプ〉を演じるために求められるというわけです。そして再生産される〈キャンプ〉ないろいろに、周囲はおどろき、反発を感じつつ、惹かれる—それはつまり無視できない存在、そこから目が離せない何か。としたら〈キャンプ〉は、何かを発信して、何かしらの変化を生み出したい誰かたちにとって、たいへん効果的な方法になりうるし、これ以上ないスタイルということになるんじゃないでしょうか？

人間を善いのと悪いのに分けるなんて、馬鹿げています。人間は魅力があるか退屈かですよ。（オスカー・ワイルド『ウィンダミン卿夫人の扇』より）

### 3. 「〈キャンプ〉についてのノート」について

実のところ、ソntagの〈キャンプ〉論自体がヒント集的散文的文章からなっていて、そこには〈キャンプ〉について58のポイントが厳密な仕切りなくつらつらと挙げられています。で、映画、絵画、小説、マンガ、そして、建物、彫刻から人物まであらゆるところに〈キャンプ〉が見出されては、「キャンプとは？」を示していくわけですが、でも、それによってその特徴が「浮き彫りになる」というようにはなかなかいきません。〈キャンプ〉はあくまでも感覚、感性、趣味の領域にあるし、ときに首尾一貫していないことだって、それゆえ〈キャンプ〉になりうるからです。つかめ

るのは〈キャンプ〉の傾向であって、その幅や奥行きは様々ということになるわけです。でも、だからこそ、「じゃあ、身の周りに〈キャンプ〉を見つけてみよう！」<sup>8)</sup>ということになったときに「これ〈キャンプ〉だと思っただけど、どうかな？」が思いもよらないところから出てきたりするわけで、それはきつとおもしろい時間ということになるでしょう。際限なく〈キャンプ〉論が続けられそうだし、そんな議論のいかにもめんどくさそうな感じもナイスです。つまり、ソntagのあの文章、「〈キャンプ〉についてのノート」は、永遠の〈キャンプ〉論のはじまりなのだ、ということはどうでしょう。

ソntagの挙げる事例から〈キャンプ〉をつかまえる難しさは、他にもあって、それは例えば、そもそも彼女が挙げる作品や人物それ自体を知らない場合で、そうなるともう、それが〈キャンプ〉なのか否か感覚のしようもありません、痛恨です。じゃあ、その映画を観れば、その小説を読めば、「なるほど、これはキャンプだわ！」ということになるかという、たぶんそうもならない。つまり、痛いのは、彼女が挙げる事例の歴史的社会的文脈、「そのとき」「その社会」の空気感が分からないということなのです。ちょんまげは江戸時代には少しも〈キャンプ〉ではないけど、今だったらなかなかの〈キャンプ〉でしょう。「今」「ここ」なら〈キャンプ〉な何かも、「あのとき」「あの場所」では少しも〈キャンプ〉でなかったりするということですよ。ソntagもこのあたりの流動性については、はっきりこう言っています。

もちろん、キャンプの標準は変わりうる。これには時の経過が大いに関係がある。以前は陳腐だったものも、時がたつと奇想天外なものになることがある。（ソntag著、高橋ほか訳、1996, pp. 448-449）

「標準」が変わる要因は、もちろん時間だけではありません。この点については、例えば、日本の高校では〈キャンプ〉だけど、アメリカのリベラルなカルチャーシーンではもう少しも〈キャンプ〉ではないといういろいろの可能性を思い起こしてみるといいでしょう。これについては、例えば、トドリック・ホールが成蹊高校にいたら—という想像をしてみたりしました。

でも、こうも言えます。日本の学校でなら、キャンプはそれほど難しくないのではないか、ほんの少しのハードルにトライするだけで、ハッとするような空気を作り出せるのではないか—。

ということで、「ノート」はあくまでも「傾向」をつかむためのヒント集ではあっても、必ずしも解答への近道ではないのですが、もちろん、〈キャンプ〉をつかまえるためにはマストです。なので、現代の空気感をふまえて、とにかくまとめ直してみたので、参考にしてもらえればと思います。

- ①まずは一般論として。キャンプとは一種の審美主義である。それは世界を芸術現象として見るひとつのやり方だ。でも、その基準は、美しいか否かではなく、その人工的なスタイル(様式)のあり方であって、それがどのように「度外れ」であるかだ。
- ②キャンプは、作られたモノや人々の行動に見出される特質のことでもある。だから、キャンプなまなざしで、何かをキャンプにすることもできるかもしれない。でも、それ自体キャンプな映画や服装や家具やポピュラー・ソングや小説や人間や建物などもある。
- ③キャンプ芸術とはしばしば装飾的芸術のことであって、内容を犠牲にして、見た目に訴えるスタイルなどを強調するものだ。ただし、まったく内容のないようなものがキャンプであることはあまりない。

- ④「よすぎてキャンプにはならない」とか「重要すぎてキャンプにはならない」ということがある。逆に「キャンプ」の実例は「まじめ」な見方からすると、「出来が悪い」とか「俗悪」ということになりがち。
- ⑤「キャンプ」的であることは、人工的で、都会的で、誇張されていて、どこか外れていて—という要素を含んでいる。純粹に自然界のものは決してキャンプではありえない。
- ⑥キャンプ趣味は、一般には認められていない真実に惹かれることがある。男性的な男の最も美しいところはどこか女性的、とか、女性的な女の最も美しいところはどこか男性的、とか。
- ⑦だからキャンプは両性具有的なものにも惹かれる。でもそれもやっぱり単純ではない。おもしろがられるのは「わざとらしくてどぎつい女らしさ」だったり、「誇張された男らしさ」だったりするのだ。キャンプにおいては、「男」と「女」の交換可能性、「人」と「モノ」の交換可能性が重視される。
- ⑧キャンプはあらゆるものをカッコ付きで見る。トマトではなく「トマト」だ。この場合「トマト」は芝居がかかったフェイクであったりすることだけど、問題は、それがどんなシチュエーションでなら「キャンプ」特有の香りを放つことになるのかということだ。
- ⑨「キャンプ」は17C末から18C初に出発点を置くことができるが、19C英国を経由して、「鋭くて秘密めいて倒錯的な色合いが加わってきた」という。そしてさらにアール・ヌーヴォーのムーブメントを経て、オスカー・ワイルドなどによって意識化された—とのこと。
- ⑩キャンプとは、ある種の誘惑の方法だ。二重の解釈ができそうな華やかな手管。分かるやつには分かるみたいな気のきいた何かである

と同時に、「部外者」にとっては一般的な意味を持つような何か。その境界にいる誰かたちは、これ、知りたくなるでしょ、その何かは何なのか。キャンプするということは、ある何かもっている「まとも」で公的な意味の背後に、そのものがもたらす私的でふざけた体験を見出すことでもある。奇妙だし、俗悪だし、不道徳にも見えるけど、分かるやつは分かる何かって駆り立てるでしょ。

- ⑪ キャンプには、純粋なキャンプと意図的なキャンプがある。自らがキャンプであることを知っているキャンプは、普通は純粋なキャンプほどおもしろくない。キャンプは、完全に素朴であるか、完全に意識的であるか（つまり、わざとキャンプ的に振る舞う場合）のどちらかで、意図的なキャンプはとても危険だ。でもリスクだからこそおもしろいという可能性に賭けるのはナイスでは？ オスカー・ワイルドはこう言ってる。「人間を善いのと悪いのに分けるなんて、馬鹿げています。人間は魅力があるか退屈かですよ。」（『ウィンダミン 卿夫人の扇』より）
- ⑫ 例えば、女装する男を侮蔑的におもしろがるための女装は、キャンプにならない。それは「自らの主題と素材とに対する軽蔑」であって、それではダメなのだ。女装自体に焦られるような情熱を注ぐような女装であれば、その「度外れ」はキャンプになる。もちろん男装もそうだ。
- ⑬ 300万枚の羽根でできたドレスで堂々と歩き回っている女も男もキャンプだ。
- ⑭ ガウディはキャンプな人だ。建築が世代を遙かに超えて文化になることを目指したその、常軌を逸した精神はキャンプだ。もちろんあの建築物自体もキャンプだけだ。
- ⑮ キャンプとは何か一般的な観点からは異常に見えることをしようとする試みのことである。ただ、異常なといっても、特別な、魅力的なという意味においてであることが多い。
- ⑯ キャンプ趣味が珍重するものは、古くなったり質が悪くなったりする過程を通じて、必要な距離が生まれたり、必要な共感が呼びさまされたりしたものが多い。ものは古くなったときにキャンプ的になるのではなく、われわれとそのものとのつながりが弱くなり、そこで試みられていることが失敗しているのにわれわれが腹を立てず、むしろそれを楽しむようになったときに、キャンプ的になるのである。
- ⑰ キャンプ趣味は、良いか悪いかを軸とした通常の審美的判断に背を向ける。良いものを悪いと言ったり、悪いものを良いと言ったりするのがキャンプではなく、キャンプがやるのは、芸術、そして人生に対して、別の、あるいはさらなる、判断基準を提供することである。
- ⑱ 芸術的成功、意図と結果が直線的に結びつくような成功は、素晴らしいとされるけど、失敗も苦痛も残酷も錯乱も、真摯で真面目な創作の結果としてキャンプにはなりうる。
- ⑲ ある途方もない努力や成果が、キャンプにならないとすると、そこに欠けているのは、視覚的華麗さや芝居があった何かだ。
- ⑳ キャンプは、真面目なものを王座から引きずりおろそうとする。キャンプはふざけていて、不真面目だ。キャンプは、真面目さに対して、新しくて、より複雑な関係を作り出そうとしている。わたしたちは、不真面目なものに対して真面目になることも、真面目なものに対して不真面目になることもできるのだ。「誠実さ」だけでは充分でないことに気づいたとき、人はキャンプにひかれる。誠実さは、要する

に無教養ないし知的偏狭さにすぎないかもしれない。

⑳真面目さを超えるための伝統的な手段、アイロニー、風刺なんかは、今日では弱いものを感じられる。それは、すでに十分にメディアに鍛えられている現代人にはふさわしくない。キャンプは新しいやり方を提示する。それは、さまざまな意味での人工、芝居がかりだ。

㉑キャンプは現代のダンディイズムである。大衆文化の時代において、いかにしてダンディとなるかという問いに対する答えが、キャンプなのだ。高尚なものとされるものが大好きな人たちも旧式ダンディーも眉をひそめるようないろいろにおもしろさを見つけ出して身に纏うのがキャンプであり、新しいダンディー。退屈なモノ・コトからの離脱を図る。キャンプは道徳的憤慨を骨抜きにする。

㉒キャンプと同性愛の距離は近い。もちろん同性愛者がみんなキャンプ趣味というわけではない。でも、同性愛者は、キャンプの最前線をなしているし、その受容者でもある。

㉓それは、ユダヤ人が、概して進歩的、革新的であるのと似ている。彼らをめぐる歴史と社会が彼らをそのような方向へと導いたのかもしれない。同性愛者とユダヤ人は、都市文化のなかで、創造的少数者グループとして際立っている。

㉔キャンプとは、スタイルをスタイルとして身につけることが、よくないこととして見られるような時代・社会で、スタイルに対してとりうる関係のことかもしれない。

㉕キャンプの経験は、高尚な文化の感覚だけが洗練を独占しているわけではないという大発見に基礎をおいている。悪趣味についての良い趣味を発見することは、わたしたちをまったく自由にしてくれる。

㉖キャンプは寛容で、快樂を求めている、やさしい。悪意やシニシズムに見えたとしても。キャンプは、真面目になることはダサいみたいなことは決して言わない。真面目にやって結果を出す人を冷笑したりしない。キャンプは、ある種の情熱のこもった失敗のなかに、成功を見いだす。

㉗キャンプ趣味とは、一種の愛情、人間性に対する愛情だ。それは、ちょっとした勝利や性格の奇妙な過剰さを判断するのではなく、めでのだ。キャンプ趣味は、それが楽しんでいる対象に共感する。この感覚を身につけている人は、《キャンプ》というレッテルを貼ったものを笑っているのではなく、それを楽しんでる。

以上、スーザン・ソントグの58のメモを、現代の空気だとこんな感じ？ という意識を経由して、28のメモにまとめ直してみたわけですが、それぞれがそれぞれを補強するようなパターンばかりではなくて、その逆になってしまうようなものもあって、そういう側面も含めて、「キャンプ」ってなんだ？挑発的ダイバーシティって？—といったことを考えるヒントになるといいかなということなんですけど、どうでしょう？ コラム本体と行き来していただいて、終わりなきキャンプ論、そして、ダイバーシティ論にはまっていたらばと。

#### 4. むすびにかえて—挑発的ダイバーシティのために

コロナ休校中にメンバーの高校生たちが他校生も含めたオープン「高校生 dunch」を企画、実施、その間の活動をリードしました。そして、これに興味を持って参加してくれたICU高校の生徒たちは、今ではレギュラー dunch の常連ですが、ぼ

くは最初に高校生 dunch の話を聞いたとき、おお！と思うのと同時に生徒部に話を通してないことがちょっと気になりました。まあ、何にしろ、報告して了承を取っておくに越したことはないわけですが、でも、以前なら、これ認めてくれるかな、とか、ストップ掛けられないかなとか考えるよりも、むしろ、学校はこの企画分かんのかな？受け止められるかな？さあどう出るの？みたいなところがあって、なんというか、もっと生意気というか、確信犯的、挑発的というか、つまり、より〈キャンプ〉なところがあったと思うのです。

朝礼の時間を使って、メンバーが手分けして全クラスで「ダイバーシティ宣言」<sup>9)</sup>のアピールをすると、これ朝礼ハイジャックですよ。何とかギリギリ通したこの企画は、やってやった感があつたし、学校全体のダイバーシティな意識にも少なからず影響を与えたと思っています。いずれにしても、この朝礼ハイジャック、企画段階から実施にかけては、わたしたちにとっても、学校にとっても緊張感のある時間で、だからこそダイバーシティなことを真剣に考える時間にもなったのだと思います。

で、今、ぼくはこんなことを自覚しています。少しずつ、少しずつだけど、削られてる。わたしたちは、公認されていて、時間も場所も、少なからお金も使えるようになりましたが、でも公認されるということは、枠に収まることでもあって、わたしたちは何か大きな生き物の尻尾みたいなもので、本体なしではありえない存在になっている？でも、さっきの朝礼ハイジャックのことなんかを振り返ってみると、尻尾がむしろ本体を振り回すようなことをもつとできるし、やっていかないとまったくない。むしろ、そんなふうにすることが、めんどくさいことしか言わないわたしたちを公認してくれている学校への貢献につながるのではないかと、どこか端のほうでおとなしく活動さ

せてもらってるようなグループに留まるのではなくと、そう考えたときに、これだろ！となったのが〈キャンプ〉論だったというわけです。このフレーズをもう一度あげておきます。

... キャンプは部外者には近寄りにくいものだ。それは都会の少数者グループのあいだの私的な掟のようなものであり、自らを他と区別するバッジのようなものにさえなっている。... 私はキャンプに強く惹かれ、またそれに劣らぬほど強く反発も感じている。(ソクタグ著、高橋ほか訳、1996, pp. 431-32)

〔付記〕本稿は、成蹊学園サステナビリティ教育研究センターリレーコラム(11)(2020年12月11日web掲載)の記事を加筆の上、本誌に再録したものです。

## 注

- 1) 活動の詳細についてはこちらを参照していただければと思います。 <https://ameblo.jp/sksd14/>
- 2) 「多様性」は白人虐殺の隠語だ(“Diversity” is a Code Word for White Genocide)。アメリカ白人ナショナリストたちの間ではこんなことも言われているようですが(渡辺靖『白人ナショナリズム』中公新書2020年)、日本では、現状、良くも悪くもそこまでの破壊力を持つには至っていないとみていいでしょう。
- 3) このあたりの感覚というか感じ方でおもしろかったのは、千葉雅也「ダイバーシティについて—否定性の複数性の肯定」 <https://i-d.vice.com/jp/article/7k9pyd/d2021-masaya-chiba> 千葉さんは、こんな風にまとめています。「真のダイバーシティとは、資本を保全するための禁止を増やすことではなく、多種多様な否定性を通り抜けながら生きることの肯定であり、否定性の複数性の肯定なのである」。ここでの「資本」を「権威」に読み替えることも可能かと。なお、この千葉コラムについてはスクール・ダイバーシティ卒業生に教えてもらいました。



- 4) マイノリティ&マイノリティフレンドリーな言動に対するこのような攻撃の由来は、「現代的レイシズム」論や「ポストフェミニズム」論で説明できるように思います。前者についてはダイバーシティのブログに解説と文献紹介があります。 <https://ameblo.jp/sksd14/entry-12429693521.html> 後者は例えば、菊地夏野『日本のポストフェミニズム』（大月書店、2019年）。これは最新の状況をまとめかつ考察したもの。あと、雑誌『現代思想』（48-4、2020年）特集「フェミニズムの現代」。
- 5) 上野千鶴子さんの発言から。 <https://digital.asahi.com/articles/ASM756K8VM75TIPE034.html>  
<https://withnews.jp/article/f0190719000qq00000000000000000000110101qq000019475A>
- 6) 「rightnow!」(文芸ダイバーシティ @Slack)
- 7) スーザン・ソントグ「〈キャンプ〉についてのノート」(スーザン・ソントグ『反解釈』〈高橋康也他訳／ちくま学芸文庫 1996年〉)に収録／原著は1966年)
- 8) こういう試みは大学の授業なんかで行われてるみたい。早稲田大学創造理工学部建築学科の授業「課題」。ソントグの58ポイントをさらに24にまで絞った「ヒント集」が提示され、学生たちは、そこから〈キャンプ〉を想像して、それをデッサンで表現するというもの。チャレンジしてみたらおもしろいと思います。ただし、この「ヒント集」はあまり親切なものではないです。学生たちには、がんばれと言いたい。  
<https://2017sekkeiensyu.wordpress.com/2018/02/21/c9%e3%80%8c%e3%80%8a%e3%82%ad%e3%83%a3%e3%83%b3%e3%83%97%e3%80%8b%e3%81%ab%e3%81%a4%e3%81%84%e3%81%a6%e3%81%ae%e3%83%8e%e3%83%bc%e3%83%88>

%e3%80%8d/

- 9) 「ダイバーシティ宣言」は通称で、正式には「多様性と平等についての宣言」というのですが、これを「生徒手帳」に載せようというのが活動の当面の目標でした。宣言の内容は以下の通り。

「多様性と平等についての宣言」(2021年度版)

- \* わたしたちは以下に挙げるものを含む多様性を受け入れ、それらを理由に誰に対しても、直接的にも、間接的にも差別、疎外をしません。  
人種、国籍、宗教、文化、言語、民族的または社会的出身と境遇、社会的性別、生物学的性別、性的指向、性自認、身体的特徴、心身の障がい、年齢、家柄、家庭環境、学内外の所属または活動、趣味趣向など。
- \* わたしたちは、差別、疎外に結びつくようなすべての言動に対してつねに繊細であることを心がけ、学校内の多様性とその平等が損なわれる場合、または、損なわれると感じられる場合、適切な方法でそれらの対処に努めると同時に、高等学校に対して、適切な方法での解決を求めます。
- \* わたしたちは、一人ひとりの多様性に寛容になり、互いにそれを尊重し合うような学校生活の実現を求め、多様性とその平等をないがしろにする全てを根絶するために努力を惜しみません。

元のテキストを作ったのは当時高3だった5人の創設メンバーで、このことを思い浮かべるときに、なんだか誇らしいわけですが、それにしてもこれが未だに「生徒手帳」に載らないというのはどうしたことでしょう？